

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00133

研究課題名（和文）ファシズムにおける「崇高」の美学と政治の関係をめぐる批判的考察

研究課題名（英文）Critical Examination of the Relationship between the Aesthetics and Politics of the Sublime in Fascism

研究代表者

石田 圭子 (Ishida, Keiko)

神戸大学・国際文化学研究所・准教授

研究者番号：40529947

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「崇高」の美学と政治の関係についてファシズムを対象に考察し、崇高の美学がファシズムの視覚表象においてどのように表れ利用されたかを多角的に分析し、ファシズムの「ポピュリスト的」政治における「崇高」の変化と利用について明らかにすることができた。研究期間には、日本のファシズムにおける視覚表象の問題も研究の対象として取り上げたものの、とりわけこれまで研究が十分になされていなかったナチズムの美術・建築の研究に注力し、具体的な分析を通してその美学と芸術の本質を解明することができた。その成果は下記の複数の論文および著書を通じて公表している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで崇高の美学がファシズムの政治やファシズム表象との関係性から論じられることは稀であり、その考察は十分に行われてこなかった。本研究の取り組みによって、崇高の美学の研究に新たな見解と解釈の道を切り拓くことができたと考える。

また、今日の政治には、ポピュリズムやアンチ・グローバリズムの傾向において、新たな全体性と中心の創出への要求が認められるが、その際には崇高の感情が利用されることもある。研究はそうした状況に対し美学と政治の連携のひとつのパターンを顕在化することによって、その連携の危険と兆候を示し、今日の状況に対処するためのひとつの手がかりを提供しえたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study examines the relationship between the aesthetics of the sublime and politics in the context of fascism, analyzes how the aesthetics of the sublime was represented and used in the visual representations of fascism from multiple perspectives, and reveals how the traditional sublime is transformed in the "populist" politics of fascism. During the research period, I also took up the issue of visual representation in Japanese fascism, but in particular, I focused on the art and architecture of Nazism, which had not so far been studied extensively, and were able to elucidate the nature of its aesthetics and art through specific analysis. The results of his research have been published in a number of articles and books.

研究分野：美学・芸術論

キーワード：ファシズム ナチズム 崇高 美学 芸術

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 崇高の美学と政治の関係

美と政治の問題は1980年代のポストモダン思想において、主要テーマのひとつであった。そこで「崇高の美学」も注目されたが、その際に崇高は、全体性の解体や脱中心化を促すものとして積極的な意味を与えられた。しかしながら、そうした思想潮流のなかで、崇高が全体性へと反転しうる危うさをも帯びていることは見過ごされてきた。

(2) ファシズムの美学・思想と「崇高」

W・ベンヤミンの「政治の審美化」という有名なテーゼ以来、ファシズムは美学や芸術と関連づけられて論じられるようになり、それ以降ファシズムの美学はスーザン・ソントグやサユル・フリードレンダーらによって論じられたものの、それらはいずれもエッセイ的であり、厳密な学術的考察に欠けるうらみがあった。

(3) ファシズムの表象研究

ファシズムの表象についての個別的具体的研究は、文学・美術史・映画研究・社会学・歴史学などさまざまな学問分野において進められ、すでに多くの蓄積がある。本研究はそれらを手がかりにしつつも新たな角度から捉え直し、崇高という観点から新たな分析を加えながら遂行することを試みようとした。

本研究は、以上の三つの学術的背景をふまえたうえで、ファシズムを念頭におきながら、リオタール以来、主にアヴァンギャルド芸術との関連で考察されてきた崇高の美学を、政治との関係から見直すことができるのかを問おうとした。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、まずファシズムを対象として「崇高」の美学の政治的意味を見出そうとするところにある。これまでファシズムと美の関係が問われる場合、多くの場合「崇高の美学」は批判対象とされていなかった。むしろ崇高の美学はリオタールの考察以降、アヴァンギャルドの美学とともに理解されており、ポジティブな意味合いが与えられてきた。本研究はそうした従来の崇高の捉え方が一面的であることを指摘し、政治との関連における崇高の負の側面も合わせて考察し、崇高の美学に新たな局面を開くことを目指した。

(2) 本研究は単なる美学研究や歴史研究ではなく、美学と政治の秘められた連携という、より普遍的な問題への視座を獲得しようとする試みであり、美学が政治に連携する際の危険と兆候について考察することを試みるものである。本研究では、崇高に焦点を当て、政治と美学という両者の連携のメカニズムを解明することで、美学と政治の関係について反省し、両者がポジティブな関係性を築いていくうえでの手がかりを得ることを目指した。

3. 研究の方法

(1) これまでファシズムを念頭に美と政治の相互浸透を論じた先行研究(W・ベンヤミンやC・H・ポーラーの美学など)や崇高の美学を論じた先行研究(カント、バーク、リオタールの崇高論など)を批判的に読解し、美と政治的イデオロギーの関係を「崇高」という観点から読み直す。

(2) ドイツのナチズムや日本のファシズムの言説や視覚表象(とくに美術、建築)を分析し、その芸術表現や美学が提示する問題について考察する。とりわけそれを「崇高」という観点から考察し、崇高の美学がイデオロギー化されていく機制について考える。

4. 研究成果

(1) ナチズムの美学的思考における美学と政治の関係の解明

1933年から1939年までのヒトラーの芸術と文化に関する演説集(Robert Eikmeyer (ed.), *Reden zur Kunst- und Kulturpolitik 1933-1939*, Frankfurt a. M., 2004.)を主な手掛かりにしながらヒトラーの文化政策および芸術に関する言説を詳細に分析し、ヒトラーの芸術観および美学と政治の接点がどこにあるかを明らかにした。ヒトラーにおける芸術と政治の結節点として指摘すべき重要な要素は、何よりも「天才」という概念にある。ヒトラーの美学に至る経緯を振り返ると、そこには天才の「自然」の内実に「民族」、さらに19世紀という実証主義の時代の洗礼を受けて「人種」があてがわれるようになったことが確認される。他方で、その能力はロマン化されて

超越化され、美的天才はニーチェの超人、そしてヴァーグナーの英雄的芸術家のイメージを介して予見者・指導者、やがて民族を復興させる英雄的政治家像に重ね合わされていった。ヒトラーが天才に求めたのは偉大な芸術作品の創造だけではなく、それを通じた民族の美的趣味の訓育であり、それを通じた民族共同体の形成であった。そうした天才イメージの源泉となったのは、天才と大衆を対立的に捉え、前者の能力を比類のないものとして神秘化したロマン主義と、そこにある種の認識能力を認めたショーペンハウアーの思想、そしてニーチェの「超人」であり、ヒトラーにおいて、それらが芸術的天才を民族の指導者Führerとする発想へと転じられていることが確認された。以上のことから、俗流化されているとはいえ、ロマン主義に流れ込んだドイツの近代美学がヒトラーの芸術観に重大な影響を与え、その根底を成していることが明らかになった。

(2) ナチズムにおける政治の美学化と崇高の関連性の解明

以上の結果を踏まえ、さらに近代美学の重要なテーマのひとつである崇高に焦点を絞って、カントによって完成された近代の崇高論の限界を指摘するとともに崇高と政治の連関について論じる可能性を探りつつ、これまでナチズムないしファシズムについて言われてきた「政治の美学化」を崇高という観点から捉えられるのかを吟味した。具体的にはナチスのイデオログであったA・ローゼンベルクとヒトラーによる崇高への言及に加え、バークにおける崇高論やリオタールの崇高論、フリードレンダーによるナチズム美学の研究などを参照しながら、ナチズムと崇高の関係について考察した。ナチズムは巨大な建築や荘厳な政治的儀式を行うことによって、無限なるものや超越性といった感覚を人々に生じさせようと努めた点で、崇高の美学を政治に利用したといえる。ヒトラーやナチズムは民族や国家という理念を、全宇宙を作る「究極的な自然の秩序」、いわば神にも等しい「無限なるもの」に置き換えようとしていたが、それは政治の中に置き換えられるときには、多くの場合、凡庸なもの、キッチュなものにならざるをえなかった。なぜなら、無限の対象は総統や民族の象徴に転換されざるをえなかったからである。そこに見られたのは象徴化された他者と一体化し委ねることによる自己の主体性の放棄と自己に対する幻想の肥大化である。ナチズムにおけるそうした崇高は、リオタールの論に照らすならば「通俗的崇高」と呼ぶべきものであったといえる。しかしその経験は、自己の万能感とともに、ある種の快をもたらしうるものである以上、崇高と通俗的崇高の境目は不明確なものであると言え、ゆえにその点において崇高の美学とナチズムとは地続きであることを指摘した。

(3) ファシズムの芸術的表象の分析と考察

本研究ではファシズム、とりわけナチズムに関連する芸術的表象を分析した。当初はこの分析を専ら「崇高」との関連から行う予定であったが、研究期間中にはそれを超えて、多角的な観点から考察を行うことができた。それを通して、従来、美的価値のないプロパガンダとみなされて十分な研究が行われてこなかったファシズム表象の、単なる「プロパガンダ」を超えた、複雑な側面を浮かび上がらせることができた。

ナチズムの建築と美術

ヒトラーのお抱え建築家であったアルベルト・シュペーアとパウル・ルートヴィヒ・トローストの建築と思想について考察し、その特徴を明らかにした。シュペーアの唱えた「廃墟価値の理論」に着目することで、一般的に新古典主義と言われるナチズム建築がロマン主義の美学と密接に関わっていることを確認したことに加え、「ナチズム建築の祖」とされるトローストの建築を詳細に分析し、彼の「汽船スタイル」にはモダニズムの胚とも言うべきものやモダンの衝動が横たわっていたことを見出した。また、第二次世界大戦下においてナチスが制作した「戦争画」を吟味し、そこに単にナチズムのイデオロギーの表現や「公式美術」の様式にとどまらない多様さがあることを指摘することができた。

日本のファシズムにおける表象の分析

村山知義の朝鮮の古典をベースにした演劇作品<春香伝>について分析し、「内鮮一体」というスローガンのもと朝鮮の宣撫に努めていた日本の植民地政策との関連がしばしば指摘されてきたこの作品が、当時村山の唱えていた「発展的リアリズム」と密接な関係があることを明らかにした。これを通して、戦時中の外的な圧迫からだけではなく、内的な政治的・芸術的動機に従って作品を制作したプロレタリア演劇人・村山知義の姿勢を浮かび上がらせることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 石田圭子	4. 巻 125
2. 論文標題 ナチズムと崇高の美学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代：神戸大学近代発行会	6. 最初と最後の頁 37-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田圭子	4. 巻 126
2. 論文標題 パウル・ルートヴィヒ・トロースト：ナチズム建築の起源をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近代：神戸大学近代発行会	6. 最初と最後の頁 151-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田 圭子	4. 巻 56
2. 論文標題 村山知義と 春香伝 : 村山の演劇論との関連から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1~23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012924	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石田 圭子	4. 巻 57
2. 論文標題 ヒトラーの美学を再考する : 芸術と政治の接点をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1~32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013078	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石田 圭子	4. 巻 124
2. 論文標題 第三帝国の戦争画について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代：神戸大学近代発行会	6. 最初と最後の頁 25～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013216	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石田 圭子	4. 巻 71
2. 論文標題 カール・ハイント・ポラーの「突然性（Ploetzlichkeit）」をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 49～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20631/bigaku.71.1_49	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石田圭子	4. 巻 55
2. 論文標題 現代イギリスの「公式戦争アート」について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	6. 最初と最後の頁 91-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石田 圭子	4. 巻 54
2. 論文標題 靖国神社における慰霊と“女性的なるもの”の関係をめぐって：現代日本のナショナリズムの一側面	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012497	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 石田圭子
2. 発表標題 ヒトラーの芸術観を再考する：第三帝国の「美学」とは何か
3. 学会等名 第37回日本ドイツ学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Keiko Ishida
2. 発表標題 Tomoyoshi Murayama and the Korean historical play Chunhyangjeon
3. 学会等名 International Conference “Modernity in Korean Art Reconsidered!”（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Keiko Ishida
2. 発表標題 The Problem of the Political Sublime in the Case of Fascism
3. 学会等名 21st International Congress of Aesthetics（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田圭子
2. 発表標題 K・H・ポラーの「突然性Plötzlichkeit」をめぐって
3. 学会等名 第70回美学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田圭子
2. 発表標題 現代イギリスの「公式戦争アート」について
3. 学会等名 第74回美学会全国大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石田圭子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 324
3. 書名 ナチズムの芸術と美学を考える：偶像破壊(イコノクラスム)を超えて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ベルリン自由大学			
韓国	東亜大学			